


平成30年度国立天文台研究集会開催報告書

平成 31年 1月 25日

国立天文台長 殿

代表者	氏名	(ふりがな) わだたけひこ 和田武彦 
	所属・職	宇宙航空研究開発機構・宇宙科学研究所・助教
研究集会名	2018年光学赤外線天文連絡会シンポジウム: 将来計画-2030年代への布石	
開催期間	2018年 9月 10日 ~ 2018年 9月 12日	
開催場所	国立天文台・三鷹キャンパス すばる棟大セミナー室	
参加人数・国数 (国数は所属機関の国数)	参加人数98名・国数 1	
発表資料等の情報	http://gopira.jp/sym2018/program.html 研究集会のプログラムや発表資料等をまとめたHPがあればURLを記載してください。提出後に作成された場合もご連絡ください。国立天文台研究交流委員会HPにリンクを張らせていただきます。HPではなく、論文や冊子を作成している場合は、可能であれば一部ご提供ください。(論文の場合はDOIの情報でも可)	
研究集会の概要	<p>光学赤外線天文連絡会(光赤天連)は、可視・赤外線天文学研究者の連絡組織であり、コミュニティの意見を取りまとめ、TMT、すばる、SPICAなど、国立天文台・JAXAが中心となって推進するフラッグシップミッションや各大学・研究者レベルで行われる小型・中規模プロジェクトの推進、将来計画の策定などを通じて、日本の光赤外線天文学の発展を目指した活動を行っている。</p> <p>光赤天連では、毎年シンポジウムを開催し、日本の光赤外線天文学コミュニティの将来計画や大学間の連携・活性化のための議論を行ってきた。</p> <p>本年は、NASAの2020 decadal surveyに向けたscience and technology definition team (STDT)による2030年代に向けた大型ミッションの検討、日本学術会議によるマスタープラン2020の策定、重力波の発見とその後の光赤外線によるフォローアップに代表される波長横断・マルチメッセンジャー天文学の興隆、光赤天連「20年後までのスペースミッションを考えるワーキンググループ」での議論を踏まえ、マスタープラン2020へ向けた討議、および2030年代に向けた布石として、ポストTMT、ポストすばる、ポストSPICAなどの長期的な戦略も含めた将来計画についての議論の場を設けるべく、光赤天連シンポジウム「2030年代の光学赤外線天文学を考える - 2018年秋 -」を企画した。</p> <p>最初に光赤外線分野取り巻く状況についてレビューを行い、次に、日本学術会議によるマスタープラン2020の説明と2020年代の将来計画について議論した。さらに2030年代に向けた地上・スペース天文学計画に関する議論をするとともに、隣接他分野での将来計画をレビューした。最後に2030年代を担う若手による発表・パネルディスカッションと総合討論を行った。全国から総勢98人の参加者を得て、活発な議論が行われた。</p>	

研究集会の成果

本シンポジウムでの大きな成果は、学術会議マスタープラン2020へのコミュニティの意思を確認できたことである。また、「2030年代将来計画検討 WG」の活動方針を確認できたことも大きな成果である。以下、各セッションでの成果を報告する。

宇宙理学委員長であるISAS/JAXA山田氏と国立天文台TMT室室長である臼田氏によるレビューにより、スペース・地上での光赤外線天文学の現状を把握することができた。

日本学術会議・天文学・宇宙物理学分科会幹事の深川氏によるマスタープラン2020の解説と、2020年代を目指した大型計画の各講演により、マスタープランへの推薦に関する議論を深め、大まかなコンセンサスを得ることができた。また、天文学・宇宙物理学分科会への推薦方法に関する議論を行い、推薦への枠組みを決定することができた。

2030年へ向けスペース計画に関しては、「20年後までのスペースミッションを考えるワーキンググループ」による検討結果の報告、NASA STDTオブザーバーからの米国での大型スペースミッションの報告、紫外線による系外惑星観測、黄道光脱出ミッションなどの報告があり、スペース計画の重要性が示された。また、海外大型計画への参加の是非、参加への筋道に関する議論が行われた。地上計画では、TMT第二期装置やすばる将来計画が議論された。

隣接分野（電波、高エネルギー、重力波、宇宙線、太陽系科学、超小型衛星）のコミュニティ代表などによる将来計画の講演と議論を行い、波長横断・サイエンス主導の軸も必要であるとの認識を得た。一方、大型観測装置プロジェクトの推進には波長別のコミュニティによるサポートも必要であるとの認識も得た。

若手からは、海外超大型計画への参加とともに、広視野宇宙望遠鏡、超小型衛星、遠赤外線干渉計と言った、日本独自のプロジェクトの重要性も示された。

大型プロジェクト計画参加に関するアンケート結果も公表され、コミュニティからの興味と参加への意思が強いことが伺えたが、参加への敷居を下げることで、コミュニティへの説明を望む声があった。また、少数ではあるが、大型計画そのものへの批判もあった。

これらの議論を受けて、本シンポジウムに合わせて設立された「2030年代将来計画検討 WG」の活動方針に関する議論も行った。

<p>その他参考 となる事項 (希望事項も 含む)</p>	
---	--